

国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWS LETTER

ニューズレター

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

2016.03 No.

18

・講演・映画上映会「原節子を想起する—戦前の映画から」 Lecture & Film Screening “Remembering Hara Setsuko: the Early Days”	P1
・国際シンポジウム「国際日本研究—対話、交流、ダイナミクス」 International Symposium “Internationalizing Japan Studies: Dialogues, Interactions, Dynamics”	P1
・ワークショップ「個と国家と産業 15年戦争下の演劇と映画の言説について」 “Individual, State and Industry: Discourse in Cinema and Theater during 15 years of War”	P2
・『外国語と日本語との対照言語学的研究』第17回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” the 17th Research Seminar	P2
・ワークショップ「アイヌ民族とオーストラリア先住民—同化・差別と研究の現在」報告 International Workshop “Ainu and Indigenous People in Australia: Assimilation, Discrimination and Current Issues”	P3
・国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」 The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences 2015	P3
・国際交流基金 平成27年ロシア若手研究者グループ招聘団 東京外国語大学 国際日本研究センター 交流会 Gathering of the Japan Foundation 2015 Invited Group of Young Russian Researchers and TUFFS ICJS	P4
・2015・2016年度 活動報告(2015年10月～2016年2月) Activity Report (Oct.2015-Feb.2016.)	P4
・国際日本研究センターブックレット集「日本語の多様性を探る」を発売 ICJS Booklet Series Complete Boxed Set, Now Available	P4

講演・映画上映会「原節子を想起する—戦前の映画から」 2015年12月21日 Lecture & Film Screening “Remembering Hara Setsuko: the Early Days”



2015年秋に訃報が報道された原節子さんを追悼して、講演と映画上映会「原節子を想起する—戦前の映画から」が企画された。講演はイリス・ハウカンブ講師（ロンドン大学 SOAS, 本学招へい教員）の「夢と希望のはじまり—1937年、国際的映画スター・原節子」。講演のあと、原節子さんを国際スターにひきあげた『新しき土』（ドイツ語タイトル『侍の娘 Die Tochter des Samurai』1937年）が上映された。『新しき土』を博士論文であつかったハウカンブ講師は、講演のなかで、戦後の小津安二郎作品への出演によって、原節子は世界でもっともよく知られた女優のひとりとなったが、原節子の銀幕デビューは1930年代半ばであること、何よりも話題の国際合作映画への出演によってスポットライトを浴びたことを指摘した。さらに、原節子の映画スターとしての個性と国家プロジェクトとが意識的につくりだした構造をたどり、ナショナリズムがますます強くなっていく時期に、原節子が「最初の国際的映画スター」となることで、国家的なプロジェクトと国際的にアピールしようという国家の欲望とのあいだで生まれた相互作用につ

いて論じた。そして結論として、映画スターとしての原節子は、近代、軍国主義、戦後民主主義、そして過去への追憶にとらわれている現在の日本といった、戦前・戦中・戦後の日本社会の劇的で多様な変化のいずれとも、親和的な関係をたやすく結んでいったこと、その魅力は、戦前の国家・映画プロジェクトが創られたときにはじまったと論じた。

『新しき土』はドイツ人監督のファンク版と伊丹万作による日本語版の二種類がある。現在流通しているのはファンク版だが、それがオリエンタリズムに満ちた「日本」表象であることから、これを批判して伊丹万作版がつくられた（ただし、伊丹版はめったに上映されていない）。このように、『新しき土』は映画史上の興味深い論点を多く抱えている。なお企画には本学近隣の方々を中心に200余人の参加があった。寄せられたアンケートからは、参加者は10代で国際スターとなった原節子の映像を十分に堪能したことがうかがえる。なおこの企画は読売新聞でも事前にとりあげられ、当日はNHKの「クロズアップ現代」の取材班による取材も受けた。（友常勉）



The lecture and film screening “Remembering Hara Setsuko: the early days” was held on Dec. 21st, in memory of the actress, who passed away in fall 2015. Dr. Iris Haukamp (SOAS, University of London/Visiting Lecturer of TUFFS) presented “Early hopes and dreams: Hara Setsuko as an international star in 1937”. Afterwards there was a screening of the 1937 “Atarashiki Tsuchi” (German title “Die Tochter des Samurais”), which made Hara an international star. Over 200 participants from Fuchu attended.

追悼・原節子「原節子を想起する—戦前の映画から」講演イリス・ハウカンブ「夢と希望のはじまり—1937年、国際的映画スター・原節子」

国際シンポジウム「国際日本研究—対話、交流、ダイナミクス」 2016年1月29日～31日 International Symposium “Internationalizing Japan Studies: Dialogues, Interactions, Dynamics”



3日間にわたって、国際シンポジウム「国際日本研究—対話、交流、ダイナミクス」が開催された。このシンポジウムは、東京外国語大学における大学院国際日本学研究院の発足にあたり、歴史学、文化研究、日本語学、日本語教育学の各分野にわたって、国際日本研究の世界的な展開の成果と現在、そして未来について考えることを趣旨として開かれた。本学社会・国際貢献情報センターと当センターも共催した。シンポジウムの構成・基調講演・報告者は以下のとおりである。

プレシンポジウム「国際日本研究の過去・現在・未来」

2016年1月29日（金）

基調講演：小松和彦（国際日本文化研究センター所長）

「グローバル時代の日本学—その現在と未来を考える」

パネル・ディスカッション：フィリップ・シートン（北海道大学）、王敏（法政大学）、張競（明治大学）、下地理則（九州大学）

シンポジウム「歴史と文化」2016年1月30日（土）

基調講演：キャロル・グラック（コロンビア大学）

「モダニティ・イン・コモン—日本と世界史」

報告① クリストファー・ガータイズ（ロンドン大学 SOAS）

報告② デイヴィッド・ヒューズ（ロンドン大学 SOAS）

報告③ イリス・ハウカンブ（ロンドン大学 SOAS）

報告④ イーサン・マーク（ライデン大学）

報告⑤ 野本京子（TUFFS）

報告⑥ 菅長理恵（TUFFS）

シンポジウム「日本における言語とその教育」2016年1月31日（日）

基調講演：影山太郎（国立国語研究所）

「国立国語研究所の歩みと日本語学」

報告① 野田尚史（国立国語研究所）

報告② 藤村知子（東京外国語大学）

報告③ 木部暢子（国立国語研究所）

報告④ 朝日祥之（国立国語研究所）

報告⑤ アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

報告⑥ 川村大（東京外国語大学）

プレシンプोजウムでは、小松和彦教授よりポピュラー・カルチャーを中心に日本文化がグローバル化していること、それを支えてきた日文研の活動紹介を踏まえて、ご自身の「妖怪研究」がグローバル化時代の日本研究の一事例でもあることが語られた。また、国内の国際日本研究の研究教育機関が協力しあう〈場〉の創出を提起された。「歴史と文化」のキャロル・グラック教授は、①日本の近代化と世界史過程、②日本帝国主義という問題、③戦争の記憶、④「失われた10年」という論点から日本近現代史をとらえ直し、日本社会が有する固有の歴史の歩みを提示するとともに、グローバルヒストリーのなかで〈日本〉を把握する枠組みを示された。また同日、国際日本研究センターの野本京子センター長は「歴史研究の磁場—農本主義を手がかりに」というタイトルで報告された。「日本における言語とその教育」では、影山



太郎教授が、国立国語研究所の歩みの紹介と、多様性に注目した日本語研究について報告された。3日間とも、基調講演と各報告をふまえて、国際日本研究のありかたをめぐるパネル・ディスカッションがおこなわれた。参加者は3日間でのべ200人。国内外の一線級の研究者がジャンルを超えて集うことで、国際日本研究の新しい機運を実感することのできるシンポジウムとなった。(友常勉)

Held in conjunction with the TUFS Institute of Global Studies inauguration, the 3-day "Internationalizing Japan Studies: Dialogues, Interactions, Dynamics" international symposium, cohosted by ICJS, considered the achievements, current situation and future for the global development of international Japan studies. In the pre-symposium KOMATSU Kazuhiko introduced the globalization of popular and other Japanese culture and the supportive role of the International Research Center for Japanese Studies. He reported on "monster research" as an example of Japan studies in the global age.

In "History and Culture", Carol Gluck reassessed modern Japanese history from the perspectives of Japan's modernization and the course of world history, Japanese imperialism, war memory and "the lost decade", thus showing Japan's particular historical progress and a framework for understanding "Japan" in global history. The same day, NOMOTO Kyoko, ICJS director, presented "The Magnetic Field of Historical Research: Agrarianism as a Lead". In "Language and its Education in Japan" Professor KAGEYAMA Taro introduced the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) and reported on a variety of Japanese research. Over 200 people attended over the symposium's 3 days. This international and multidisciplinary gathering of leading researchers hinted at new trends in internationalizing Japan studies. (Tsutomu TOMOTSUNE)

ワークショップ「個と国家と産業 15年戦争下の演劇と映画の言説について」2015年12月8日 "Individual, State and Industry: Discourse in Cinema and Theater during 15 years of War"

講師：イリス・ハウカンブ（ロンドン大学 SOAS、本学招へい講師）
菅孝行（評論家、梅光学院大学教員）



本企画は、戦前日本映画を戦争と映画産業の観点から研究を進めているハウカンブ氏と、演劇評論家であり、戯曲家・評論家である菅孝行氏の二人の報告と対話を通して、15年戦争下の演劇と映画の言説を検討することを目的として開催された。

まずハウカンブ氏は、戦争やファシズムの原因を絶対的な国家の統制に帰するという考え方は怠惰であると批判し、このことが1939年の映画統制法である映画法についても該当すると指摘した。そのうえで、1939年の映画法は、1934年のドイツ映画法に多くの示唆を受けていること、映画法の主要な目的である「公序」「良俗と道徳」の維持が、1925年の治安維持法にもとづいているなどの背景を説明した。その内容は、検閲の強化、映画在庫の合理化、さまざまな映画製作スタジオの統合、配給と上映の統一、そしてもちろんすべての映画人の登録制度の義務化、ポストプロダクション・システム（撮影後の作業）まで適用されて



いた。その上で「国策映画」の定義について問題提起し、そうした映画法と映画産業の成果が一致した代表例として『燃ゆる大空』（監督・阿部豊 1940）『陸軍』（木下恵介 1944）などを紹介した。しかし『陸軍』は監督の反戦・厭戦的な意思が反映していること、それによって国家統制に従属されない〈個〉が存在していることを指摘した。

菅氏は映画統制法のような法が演劇には存在しないこと、ただし、1940年には新協劇団・新築地劇団の幹部などが大量逮捕され、同年10月には大政翼賛会が結成されるなどして、演劇と演劇人の国策の動員が始まった経過を説明した。同時に注目される動向として、戦時下に活発であった移動演劇の事例（たとえば1941年から一年間で1071公演）について紹介した。そして手作りの性格・一回性で再生ができないパフォーマンスとしての演劇の性格を、映画と対比して説明した。

ふたつの報告を通して、映画と演劇の相違、国家統制や国策の進展の相違がうきぼりにされた。演劇のほうが波及力は小さいとしても、国家統制から洩れる部分は多いといえるかもしれない。しかし国策映画も動員によって観客数を水増ししており、統制が貫徹していたと結論することはできない。上記の意味で〈個〉と〈国家〉とのあいだの連続と切断もまたうきぼりにされた。なお当日は30名以上の参加を得て、活発な議論が交わされた。

（友常勉）

The event's aim was to consider discourse in cinema and theater during 15 years of war through reports by and dialogue between dramatist and critic Takayuki KAN (Critic, Baiko Gakuin University) and Iris HAUKAMP (SOAS, University of London/ Visiting Lecturer of TUFS), who researches prewar Japanese cinema from the perspective of war and the film industry. Their reports revealed the differences between cinema and theater, and those between state control and the pursuit of state policy. Theater frequently escaped state control. With the Cinema Law and the mobilization of audiences to inflate viewing figures for propaganda films, cinema cannot be said to have been under full control either. Thus, the connect and disconnect between "individual" and "state" also came into focus. (Tsutomu TOMOTSUNE)

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第17回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" the 17th Research Seminar

- 日時：2015年12月5日（土）14:00～17:40
- 場所：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟4階419号室）
- 発表者・講演者と題目
- ・大谷直輝氏（東京外国語大学）／研究発表
「空間表現に現れる話者：英語不変化詞の直示的機能を中心に」
- ・菅原睦氏（東京外国語大学）／研究発表
「チャガタイ語 'olča' について—15世紀中央アジアにおけるペルシア語・チュルク語関係の一例として—」
- ・西村義樹氏（東京大学）／講演
「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点」

本学の大谷氏（認知言語学・英語学）は英語の不変化詞の直示的機能について考察した本発表で、まず先行研究で一部の用例を除いてほとんど触れられていない不変化詞の直示的用法がどの程度広範に見ら

れるかを辞書を用いて調査し、不変化詞の直示的機能の分類・記述・分析を行った。また、直示的機能の分析を通じて、言語化されない発話者から見た相対的な位置関係がどのように言語に反映されているかについても考察した。英語の豊富な実例の分析の結果、不変化詞には広範に直示的機能は定着しており、分布と意味拡張を見ると空間的な直示機能がその他の直示的機能の基盤となっていることが主張された。

また本学の菅原氏（言語学・中期チュルク語）は本発表において、15世紀チャガタイ語文献において従来 olča と読まれてきた形式をとりあげ、ペルシア語からの翻訳文献『友愛のそよ風』の分析を通じて、これが実際にはペルシア語 ānči (<ān「それ」+či「何」)の前半部分に対応するチュルク語 ol に置き換えたものであり、従って



olči と読むべきであることを示した。発表ではまた、このような形式が用いられる背景にあった、当時のチュルク語-ペルシア語二言語使用についても考察が加えられた。

第三番目に、東京大学の西村義樹氏（認知言語学）による講演が行われた。

著名な認知言語学の研究者である西村義樹氏は、まず認知文法の基本的コンセプトである、記号体系（の一環）としての文法、捉え方の重要性、意味構造の個別言語固有性、語彙（辞書）と文法の連続性、使用（用法）の重視といったトピックについて、代表的な先行研究での言及例の紹介を通じて確認を行った。その上で、本講演でキーワードとなる「好まれる言い回し」あるいは同義的な用語としての「慣習

的な表現様式」、「ニッチ」の重要性について、やはり代表的な先行研究でどのように扱われてきたかを紹介された。その後、事例研究として日英語の使役構文と受動構文の分析が紹介された。そこでは、ボイスという観点から先行研究の知見も多い使役構文と受動構文を題材として、豊富な具体例を挙げ、各構文のプロトタイプからの拡張と好まれる言い回し、すなわち「日本語らしさ」と「英語らしさ」とされる現象の分析が紹介された。



当日は参加者が36名にのぼる盛会となり、各発表と講演の後には、発表者・講演者と会の参加者との間で活発な質疑応答や意見交換が行われ、充実した研究会となった。（三宅登之）

Dec.5th, 2015 Lecturer: Yoshiaki NISHIMURA (University of Tokyo) Speakers: Naoki OTANI, Mutsumi SUGAHARA (TUFU)

Naoki OTANI presented "Speaker position in spatial expressions: the deictic function of particles in English". Dictionary-based analysis revealed the extent to which deictic meanings have become established and how spatial deontic functions form the basis for other deictic meanings.

Mutsumi SUGAHARA presented "On 'olča' in Chagatai – the connections between Persian and Turkish in 15th century central Asia". He analyzed the translation of "Breezes of Love from the perfumes of generosity", showing how the 15th century Chagatai form conventionally read olča in fact originated from the first part of the Persian āncī (ān "that"+čī "what") and so should be read olči.

Yoshiaki NISHIMURA presented "Vocabulary, grammar and preferred fashions of speaking – a cognitive grammar perspective". He gave a literature review of "preferred fashions of speaking" and introduced research into causative and passive constructions in Japanese and English. From the perspective of voice, he analyzed these forms and their semantic extension in detail to illustrate the phenomena of "Japaneseness" and "Englishness". (Takayuki MIYAKE)

ワークショップ「アイヌ民族とオーストラリア先住民—同化・差別と研究の現在」報告 2016年1月21日 International Workshop "Ainu and Indigenous People in Australia: Assimilation, Discrimination and Current Issues"

2014年、札幌市議（当時）がアイヌ民族へのパッシングをTwitterで発言した。歴史的な認識は進んだとはいえ、人種差別的な移民政策と先住民政策のもとで、オーストラリア先住民は植民地主義的な「知」の構造に規定されてきた。また、多くのオーストラリア先住民が都市に居住しているにもかかわらず、郊外に住む先住民というイメージも強い。このワークショップでは、アイヌ民族とオーストラリア先住民の研究者による最新の研究を通して、先住民をとりまく現状を理解し、研究交流をはかることを目的とした。報告者とタイトルは以下の通り。岡和田晃（文芸評論家・共愛学園前橋国際大学非常勤講師）「アイヌ民族否定論に抗う想像力—新谷行、三好丈夫から向井豊昭まで」、マーク・ウィンチェスター（神田外語大学教員）「アイヌ民族否定の十年：河野正道から金子快之に至る負の系譜」、山内由理子（本学総合国際学研究院教員）「都市に暮らすオーストラリア先住民」。報告では、岡和田氏が昨年の編著『アイヌ民族否定論に抗する』（河出書房新社 2015年）発行にいたった経緯と、文学批評の立場から鳩沢佐美夫や向井豊明、三好丈夫、砂澤ピッキらの言葉を紹介し、アイヌ民族の「外部」や「周辺」に残されている重要な言説を拾い上げた。マーク・ウィンチェスター氏は、70年代にアイヌ解放運動に関与しながら、近年には小林よしのりとともにアイヌ民族否定論に傾斜するようになった

人類学者・河野正道の検討を通して、植民地にしてトポスである北海道の意味、アイヌ民族をめぐる状況と世界的な先住民否定の風潮を批判した。現在進行しているアイヌ民族に対する差別と同化主義を厳しく問題提起した二つの報告のあと、山内氏は、都市に居住するオーストラリア先住民に焦点をあててきた自身の研究を紹介しながら、都市が有する文化的多様性のなかで、アイデンティティや自己決定性を確保していく「場」をつくってきた、オーストラリア先住民の日常的な営みを報告された。

マジョリティによる先住民の理解や規定は、「国民」を前提とした人間理解にもとづいており、それはマイノリティとしての先住民の自己決定権を奪う同化圧力をとまっている。アイヌ民族研究とオーストラリア先住民研究はもちろん別々である。ただし、3つの報告をとおして、マジョリティとの関係において非対称的な先住民の存在と文化にアプローチしてきた研究が、相互に補いあうことが可能であることを確認したワークショップであった。30名の参加で、討論も活発におこなわれた。（友常勉）



The "Ainu and Indigenous People in Australia: Assimilation, Discrimination and Current Issues" workshop, co-hosted by the Comparative Japanese Culture and International Cooperation sections, aimed at an understanding of the current situation for Ainu and indigenous Australian people through the latest research findings and at providing an opportunity for research exchange. The presenters were: OKAWADA Akira (literary critic; part-time lecturer, Kyoai Gakuin University) "Imagination for Resistance to Ainu Denial: From SHINYA Gyo and MIYOSHI Fumio to MUKAI Toyoaki"; Mark WINCHESTER (lecturer, Kanda University of International Studies) "10 Years of Ainu Denial: A Negative Genealogy from KONO Motomichi to KANEKO Yasuyuki"; YAMANOUCHI Yuriko (lecturer, TUFU Institute of Global Studies) "Indigenous Australians Living in Cities". (Tsutomu TOMOTSUNE)

国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」2015年8月1～2日 The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences 2015

東京外国語大学「学習の可視化・多様化を指向した e-Learning 教育システムの開発と教育の高度化」事業主催、当センター国際日本語教育部門共催で「母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築-国内外の日本語教育研究機関との協働的研究」の一環として開催した。曾志朗院士（中央研究院）、協定大学国立台湾師範大学より、鄧守信教授・宋暉廷教授・陳柏熹教授・陳浩然教授、陸潔先生（上海外国語大学）、Hintat Cheung 教授（香港教育学院）、David Monk 教育学院長・Li Ping 教授（ペンシルバニア州立大学）、長谷川信子教授（神田外語大学）、迫田久美子教授（国立国語研究所）、本学より富盛伸夫名誉教授・川口裕司教授・高島英幸教授・

投野由紀夫教授・佐野洋教授・望月圭子が、脳科学と第二言語習得、e-learning、ウェブ誤用辞典構築、華語文能力測検について活発な議論が行われた。（望月圭子）



It was held on August 1st and 2nd 2015, as part of the International Japanese Education Division's "Japanese Language Research Based on Learners' Native Languages and Construction of an Online Dictionary – International Collaborative Research with Japanese Education Bodies". Ovid J-L TZENG (Academia Sinica), Professors Shou-Hsin TENG, Yao-Ting, SUNG, Po-Hsi CHEN and Hsueh-Chih CHEN from partner university National Taiwan Normal University, Jie LU (Shanghai International Studies University), Professor Hintat CHEUNG (The Hong Kong Institute of Education), Dean David MONK and Professor Ping LI (Pennsylvania State University), Professor Nobuko HASEGAWA (Kanda University of International Studies), Professor Kumiko SAKODA (NINJAL), Professor Emeritus Nobuo TOMIMORI and Professors Yuji KAWAGUCHI, Hideyuki TAKASHIMA, Yukio TONO, Hiroshi SANO and Keiko MOCHIZUKI (TUFU) discussed brain science and SLA, e-learning, online error dictionaries and Chinese language proficiency measurement. (Keiko MOCHIZUKI)

国際交流基金 平成27年ロシア若手研究者グループ招聘団 東京外国語大学 国際日本研究センター 交流会 2015年12月17日 Gathering of the Japan Foundation 2015 Invited Group of Young Russian Researchers and TUFS ICJS

国際交流基金招聘平成27年度ロシア若手日本研究者グループと本センターとの交流会が開催された。ロシア日本研究者協会事務局長セルゲイ・グリシャチョフ氏をはじめとする研究者と交流基金担当者や通訳を含め計14人の方々、そして本学からはロシア社会経済史の鈴木義一氏、当センター教員(坂本・谷口・友常・野本)、6人の博士後期課程を中心とする本学の大学院生とが一堂に会し、親しく交流する機会となった。

参加者の自己紹介と国際日本研究センターの活動紹介後の自由懇談では、なごやかな雰囲気の中、若手研究者同士の積極的な意見交換が見られ、短時間ながら密度のたかい交流であった。ロシア側

On December 7th ICJS held a social event with the Japan Foundation invited group of young Russian researchers. The group of 14 (10 researchers, a Japan Foundation representative and interpreters) joined Yoshikazu SUZUKI (Professor, Russian Socio-Economic History), ICJS member-professors and 6 doctoral students (all TUFS) for a friendly social gathering. In the genial atmosphere, fellow young researchers actively exchanged opinions during the short but meaningful event. It proved to be a good opportunity for all the young researchers to experience the diversity of the field of Japan-related researches in the world. (Kyoko NOMOTO)

研究者のテーマは「19世紀後半から20世紀前半の日露関係」や「西川如見の著作にみられる江戸時代の思想家の日本と世界のイメージ」というように、歴史・政治・思想・文学等多岐にわたり、中国・韓国・ドイツからの留学生を含む本学の若手研究者とお互いの研究テーマについて熱心に語り合った。ロシアそして本学で学ぶ若手研究者にとって、交流会は世界の日本研究の多様性を実感するよい機会になったと思われる。(野本京子)



2015/6年 活動報告 (2015年10月～2016年2月) Activity Report (Oct 2015-Feb 2016)

■講演会・ワークショップ等■

- 12月5日(土) 対照日本語部門・国際日本語教育部門共催主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第17回研究会 西村義樹氏(東京大学)、発表者: 大谷直輝氏、菅原睦氏(東京外国語大学)
- 12月7日(月) 国際交流基金 平成27年ロシア若手研究者グループ招聘団 東京外国語大学 国際日本研究センター 交流会
- 12月8日(火) 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 ワークショップ「個と国家と産業: 15年戦争下の演劇と映画の言説について」イリス・ハウカンブ氏(ロンドン大学 SOAS、本学特別招へい講師)、菅孝行氏(評論家、梅光学院大学)
- 12月21日(月) 東京外国語大学国際日本研究センター主催、東京外国語大学社会・国際貢献情報センター共催「TUFS Cinema: 追悼 原節子「原節子を想起する——戦前の映画から」(映画『新しき土』本編上映+専門家による講演)」イリス・ハウカンブ氏(ロンドン大学 SOAS・本学特別招へい講師)

2016年

- 1月21日(木) 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 ワークショップ「アイヌ民族とオーストラリア先住民——同化・差別と研究の現在」岡和田晃氏(文芸評論家・共愛学園前橋国際大学)、マーク・ウィンチェスター氏(神田外国語大学)、山内由理子氏(東京外国語大学)
- 1月29-31日(金-日) 東京外国語大学 大学院 国際日本学研究院主催 東京外国語大学国際日本研究センター、東京外国語大学社会・国際貢献情報センター共催 国際シンポジウム「国際日本研究—対話、交流、ダイナミクス」小松和彦氏(国際日本文化研究センター)、フィリップ・シートン氏(北海道大学)、王敏氏(法政大学)、張鏡氏(明治大学)、下地理則氏(九州大学)、キャロル・グラック氏(コロンビア大学)、クリストファー・ガータイズ氏(ロンドン大学 SOAS)、デイヴィッド・ヒューズ氏(ロンドン大学 SOAS)、イリス・ハウカンブ氏(ロンドン大学 SOAS)、イーサン・マーク氏(ライデン大学)、野本京子氏(東京外国語大学)、菅長理恵氏(東京外国語大学)、影山太郎氏(国立国語研究所)、野田尚史氏(国立国語研究所)、藤村知子氏(東京外国語大学)、木部暢子氏(国立国語研究所)、朝日祥之氏(国立国語研究所)、アンナ・プガエワ氏(国立国語研究所)、川村大氏(東京外国語大学)

■会議歴■

- センター会議: 2015年10月8日、11月12日、12月10日、2016年1月14日、2月4日

■今後の活動予定■

- 3月1日(火) 国際日本研究センター主催 報告会「中国における日本語教育事情—中国赴日本国留学生予備学校の基礎日本語教育—」赤桐敦氏(京都励学国際学院)、鈴木美加氏(東京外国語大学)
- 3月5日(土) 国際日本研究センター 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第18回研究会 下地理則氏(九州大学)、発表者: 浦田和幸氏、萬宮健策氏(東京外国語大学)

■ Lectures and Workshops ■

- 5 Dec.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 17th Research Seminar by Yoshiki NISHIMURA (University of Tokyo), Naoki OTANI, Mutsumi SUGAHARA(TUFS)
- 7 Dec.: "Gathering of the Japan Foundation 2015 Invited Group of Young Russian Researchers and TUFS ICJS"
- 8 Dec.: ICJS International Workshop "Individual, State, and Industry: Discourse Cinema and Theater during 15 Years War" by Iris HAUKAMP (SOAS; CAAS Visiting Researcher at TUFS), Takayuki KAN(Critics, Baiko Gakuin University)
- 21 Dec.: TUFS Cinema: Remembering Hara Setsuko- the Early Days "Early Hopes and Dreams: Hara Setsuko as an International Superstar in 1937" hosted by International Center for Japanese Studies by Iris HAUKAMP (SOAS, University of London / Visiting Lecturer of TUFS)

2016.:

- 21 Jan.: International Workshop "Ainu and Indigenous People in Australia: Assimilation, Discrimination and Current Issues" by Akira OKAWADA (Literary Critic, Kyoai Gakuen University), Mark WINCHESTER(Kanda University of International Studies), Yuriko YAMANOUCHI(TUFS)
- 29-31 Jan.: International Symposium "Internationalizing Japan Studies: Dialogues, Interactions, Dynamics" by Kazuhiko KOMATSU (International Research Center for Japanese Studies), Philip SEATON(Hokkaido University), WANG Min(Hosei University), ZHANG Jing(Meiji University), Michinori SHIMOJI(Kyusyu University), Carol GLUCK (Columbia University), Christopher GERTIES (University of London, SOAS), David HUGHES (University of London, SOAS), Iris HAUKAMP (University of London, SOAS), Ethan MARKS (Leiden University), Kyoko NOMOTO (TUFS), Rie SUGANAGA (TUFS) Taro KAGEYAMA (National Institute for Japanese Language and Linguistics [NINJAL]), Hisashi NODA(NINJAL), Nobuko KIBE(NINJAL), Anna BUGAEVA(NINJAL), Futoshi KAWAMURA(TUFS), Tomoko FUJIMURA(TUFS)

■ Meetings ■

- Center meetings: 2015-8 Oct, 12 Nov., 10 Dec, 2016-14 Jan., 4 Feb.

■ Future Events ■

- Tue. 1 Mar. Report "Japanese Education in China: Basic Japanese Education at Preparatory Schools for Chinese Students to Japan" by Atsushi AKAGIRI(Kyoto Reigaku International Academy), Mika SUZUKI(TUFS)
- Sat. 5 Mar. "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 18th Research Seminar by Michinori SHIMOJI(Kyushu University), Kazuyuki URATA, Kensaku MAMIYA(TUFS)

国際日本研究センターブックレット集『日本語の多様性を探る』を発売 ICJS Booklet Series Complete Boxed Set, Now Available



国際日本研究センターとして平成23～25年度、科学研究費補助金「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、『日本語人』の生活言語誌的研究」(基盤研究(B)・課題番号: 23310176・研究代表者: 野本京子)で行った研究成果の一部と、それから継続して進めた調査を基に、社会言語部門では平成26～27年度に講演会を実施した。またその講演記録をブックレット『日本語の多様性を探る』シリーズ4冊目となる『日本を離れた日本語』として出版した。ブラジル、北米、ドミニカ、パラオ、台湾、インドネシアにさまざまな理由、経緯で海を渡った日本語が見せる、それぞれに異なった様相を報告したものである。さらに、これまで出版したブックレットと併せて、シリーズ5冊をひとつに所蔵できるブックケースも作成した。(坂本恵)

発行 東京外国語大学国際日本研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラ・グローバル2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>